

○創刊以来五年、幾多の困難もありましたが、会員諸兄姉の熱意と御支援とによって「論究」も第十号を数えることができました。当初の刊行計画年刊四号は実施されなかつたとはいえ、創刊号以来の多彩な掲載論文は、いずれも多少なりと日本文学の研究に寄与し得ていると信じております。今後とも一層の御協力をたまわるとお願いいたします。

○本学に永年在職され、本学会設立にあたって御尽力いただいた清水泰先生が本年三月をもって定年退職されました。本学会ではこれを記念する行事をいろいろ企画中ですが、その一つとして「論究」第十一号を先生の退職記念号とすることになりました。九月刊行の予定です。

○創刊号より第十号までいずれも残部が少々あります。御入用の方は御申越し下さい。  
頒価 創刊号 一〇〇円(送料十六円)  
二号—十号 一〇〇円(送料 八円)

立命館大学日本文学会清視抄

一、本会は立命館大学日本文学会という。一、本会は日本文学の研究を推進すると共に会員相互の親睦を図る事を目的とする。

一、本会は機関誌「論究日本文学」を刊行し、研究会講演会を開催する他、事業を行う。

一、本会の会員は普通会員、準会員、賛助会員とする。

一、普通会員は立命館大学日本文学専攻の教員、卒業生、在学生とする。

一、本会に役員として、会長一名、評議員若干名を置く。

一、会員は総会を形成し、会則の変更その他の大綱は総会に於てこれを決する。一、本会の経費は会費その他の収入による。

昭和三十四年四月二十日印刷  
昭和三十四年四月二十五日発行

非売品

編集兼 立命館大学日本文学会  
発行者 森 本 修

印刷所 京都市上京区上長者町通  
淨福寺東入ル

共同印刷株式会社  
京都市上京区河原町通  
広小路西入ル

立命館大学日本文学会

本会への入会申込・会費の払込はすべて左記へお願い致します。

入会金 五拾 円

会費 一年四百円(四回分納も可)

京都市西陣局区内

河原町通広小路西入ル

立命館大学文学部内

立命館大学日本文学会

振替京都三三八三番

戦中のこと、必要あつて某権威の「徒然草」の註釈書を繙きました。書誌・有職・語義などの穿鑿には、その人の一生をかけられただけあつて、感服しましたが、論には失望しました。書誌考証の学の深さとは無縁の、中学生の感想文なのです。むしろ、小林秀雄氏の軽々と読み書いた「徒然草」の本質に鋭く迫る点のあるのに、肩身狭い思ひをしました。見事な業績ながら国文学者は文学者ではないのか、といふいつもの思ひに捉はれました。やりきれぬまま、「この人の理解は、言葉のうは面にとどまらぬ、思想の深みに及ばぬのです。詩人とは、凡常の言葉の組み合わせに非凡の想を托し得たものの謂ひです。凡常の語の解明は職人の仕事、非凡の想の解説は文学者の仕事と、考へてをりました。」と書きつけました。

戦後には、別のなまきけな思ひにかけられることが多くなりました。例へば、「心中天の網島」の「ハテ刀差すか差

或る感想

村 田 穆

さぬか、侍も町人も客は客、なんぼ差いても五六本は差すまいし、よう差いて刀脇差たつた二本、侍ぐるめに小春殿もらうた」とか、「こちは町人刀差いたことはなけれど、おれが所に沢山な新銀の光には、少々刀も捻ぢ歪めうと思ふもの」とかを切り出して、「かれらはもはや武士の前に卑屈に叩頭することを潔しとしなかつた。近松

しみを集中して、腑抜けの治兵衛に同情をそそらうとするのが、大衆演劇作者の手法なのです。今宵の小春の先客を武士と聞いて、それは治兵衛なのをこまかす口実と邪推しての、太兵衛の強がりの悪態に含まれておますのが、右の引用なのです。金力の他に尊いもの知らず、金力ですべてを、ここでは恋を、踏みにちらうとするエゲツない俗物根性、現代の大衆演劇にも繰り返されて、素朴な観客も、激しい憎悪を燃やす冒瀆の放言の一部なのです。観客に最も嫌はれる男の、最も嫌はれる言葉として、発せられたところなのです。その感じすらもち得ぬなまきけな。

書誌考証の学は、文学以前のものながら、基礎学として無用ではありませぬ。しかし、古典がまるで読めず、ただ自分に都合のよいところだけを切り出して、いたづらな狂態をさらす文学以外の公式論の百害に至つては、見許すわけにはゆきませぬ。

# 教材として見た

## 『清兵衛とひょうたん』

水田 潤 編

中学校の国語教科書に採られている近現代の作家の作品では、志賀直哉のものがいちばん多い。中でも『清兵衛とひょうたん』は頻度ももっとも多く、六社がこれを採用している。しかし、皮肉なことに、作者はこの作品を、教材として適当なものとは考えていないらしい。『続創作余談』でもそういう意味のことを言っているし、氏の監修するG社本にもこの作品は載せていない。

ところで、わたしはことしの「国語科教育法」で、『教材として見た』清兵衛とひょうたん』という課題の報告書を出させた。できれば、中学生を直接に対象とした調査資料をもとにして、報告するようという条件をつけた。学生たちは、それぞれ下宿のこともや、郷里の中学生、教育実習校の生徒たちを対象とした調査資料をもとにした報告書を出してくれた。

いるのであって、中学生達が好んで収集する切手や古銭の類であってはならぬところに、理解への距離がよこたわっている。

清兵衛のひょうたんに対する特別な愛着にも理解なく、清兵衛の云い分をも一言も聞きとげようとしない教師にも注意したい。言下に清兵衛を叱りつけ、ひょうたんを取上げて小使にやってしまった教師である。生徒がこの作品の教師を通じて教師という者は、こんなにも生徒の心情を理解しないもの、また理解すべく生徒の云い分を聞いてみようともしない頑迷な人間であるかの如く思いこまないだろうか。生徒達が毎日、毎時実際に接触し、現にこの教材を取扱っている教師をも、清兵衛を叱った教師と同様な存在であると受取る杞憂を感じる。文学教育が究極の目標を人間形成におく限り、生徒と教師との結ばれ方は、生徒が胸襟を開いて語ることでできる教師だという信頼感の上に立たねばならない。この点から、類型化された教師の登場は教育の場にプラスの効果をもたらさない。漱石の『坊ちゃん』が教材として排撃されるのと規を一にする。

指導者の立場の決定は、文学教育の場合、

学生諸君の作品評価は、たとえば、次のAさん(三回生女)のように、この作品を教材として高く評価して生徒たちに対する立場と、B君(四回生男)C君(三回生男)のように、この作品を一応否定的に評価する立場に立って生徒たちに対する態度とがあった。

### △Aさんの意見▽

- (1) 整った構成と、簡潔でしかも行きどいてた描写などは、生徒たちの表現の上にも、大いに考えさせられる点がある。
- (2) 話し手の人柄まで表現し、方言などを用いて面白く書かれていた点など、小説の興味を感じさせるところが多い。
- (3) すぐれた小説家志賀直哉に親しみ、読書の興味を広めることができる。

『清兵衛とひょうたん』を読んで、志賀直哉氏の数篇の短い作品を読み終った時と同様

かなり重大な意味を持っている。このことについて、ここでくわしく述べていることはできないが、次のC君(三回生男)の報告は興味深い。

### △C君の報告▽

『清兵衛とひょうたん』が多く中学二、三年の教材として用いられているところから、中学二年を一名、さらに「清兵衛」と同じ年の少年が、この小説をどう理解するかを知りたいと思ったから小学校五年の児童を一名対象に選んだ。中心は中学二年の少年におく事にした。この少年はかなり児童文学書を読んでいた。たとえば山本有三、佐藤春夫、有島武郎、国分一太郎などの作品である。

こういった少年に「文学とはどんなものか」という大きな課題の小さな輪郭「人間の心の動き」をわからせる事が、今後この少年の勉強にプラスになるだろうと思った。

文学は人間内面の心理を描き出す事により、読者に人間の普遍的な真実や「どう生きるべきか」を示唆する。……それはいつのどんな人間もひきつける力を持っている。……この文学の理解の為にここでは次のような要項で語り合う事にした。

のなごやかさを感じた。また作者の澄んだ眼によって表現された笑いというようなものを感じる。あの一一つの言葉から表面に表われている以上の作者の実感が感じられる。それは作者が自己の実感をごまかす事なく、自己の実感を相手の内部にまで浸透させ、そこに調和の世界を実現しようとしているからである。そういう実感のするどさと切実さをもつて描いたこの文章は、作者が持っていたすぐれた描写力によって生まれたものだ。

### △B君の意見▽

私たち年配の者ですらひょうたんという酒器は、手にしたことも、見たことも少ない。ひょうたんに対する受取り方は、明治中期頃の人達の感覚のそれとは大きな距りがある。恐らく中学生らはひょうたんその物が、どんな用途のものだったかすら知るまい。しかも、そのひょうたんが作中において清兵衛と大人たちとの価値判断の対象となっていて、作品構成上の大きな要素をなしているのである。生徒の側からいえば、ひょうたんよりもっと親近感のある物であった方が、理解が直接的であろうが、ひょうたんであるところに、この作品に軽いユーモアが醸し出されて

(一) この小説に引きつけられたか。

(二) どこにひかれたか。

(三) なぜだろう。

(イ) その時の主人公の感情……清兵衛の心の動きの認識を中心として追求し、(四)を明かにしつつ「文学」とはどんなものかを考えさせようとした。

(ロ) 周囲の様子……「教員や父親の清兵衛との関係」の質問が当然入れられる。

(ハ) これで作者は何をいおうとしたのだろうか。

(ニ) 君はそれをどう思うか。……作者の意図と現実の交錯。

しかし二回程読ませた後に、すでにこの展開につまりきぎができた。

というのは、ひょうたんに熱中するという気持ち……十二歳の少年の質問「ひょうたんを集めてどうするの?」、「なぜこつと屋はそんなものを買うの?」「ひょうたんはなににつかうの?」にも出ているように……いわば一見前近代的な骨董品に熱中する感情は二人にはよくわからないらしかった。小説とは放れたこの感情をわからせる必要があった。なぜなら小説を読む時には一応作者と共通の心理が存

在しなければならぬからである。と共に、(一)(二)の設問は色あせてしまった。そしてまた一面この教材が現代の文学教育の教材として難点があるとも考えられてきた。

この作品には触れられていない前提の心理を何とか説明した後、もう一度読みなおした

が、(一)(二)の設問は適当でなかったようだ。年下の少年の「ひょうたん」に熱中する事などつまらない、あまり立派な仕事でない。ピアノが好きというのならよくわかるけれど……という言葉はすでに、志賀直哉の書いた少年を理解する事の不可能な事の立証だった。「清兵衛」の「ひょうたん」に熱中する」という気持そのものは現代的色彩の薄いものであり、この少年の言葉は、現実の道義

的实践的な意味からは正しいにちがいない。それにしても、この五年生の少年に求めた最初の課題はこれが結論であり、他は捨象するほかなかった。

このつまずきから要求された事は、彼等に清兵衛の心を理解させる事だった。

そこで次のようないくつかの質問を試みた。

(1) 清兵衛はどのようにしてひょうたんをつ

くったのだろうか。

この質問は清兵衛のひょうたんをつくるようすやその顔の表情を理解させるに役立った

(2) 清兵衛のひょうたんづくりに熱中したようすはどんなところに出ているだろうか。

○ひょうたんを売って胸がどきどきしお

金をとりにかけ出したところ。

このようにして次第に清兵衛の気持にひき込んでいく事に成功した。やっと、ひょうた

んづくりという事がわかってきたようだ。

次にはこの清兵衛を囲む父母や教師と清兵衛の関係に進む事にした。これによって一層

清兵衛の気持を浮彫りにする事ができると考

えたからである。

(3) 清兵衛の父は、そのひょうたんづくりを

どう思っていただろうか。

○きらっていた。○「こどものくせに」と

にががしく思っていた。

(4) 「馬琴のひょうたん」について清兵衛は

どう考えただろうか。大人たちはどう考え

ただろうか。

大人たちは馬琴がえらい人だという事を

知っており、「大きくて長くてすばらし

いひょうたんだ。」といったが、清兵衛だけは決していいひょうたんだとは思わなかった。

この質問を機として、中学二年の少年はこ

んな事をいいだした。「清兵衛の気持は普通の好きだという事と違っている。大人たちの意見も正しいと思っ

ていない。」

この言葉に僕も手を叩いた。ここに大きな

直哉の文学の発見があると考えた。いわば普

通にいわれる熱中という事でなく、自分があ

る対象に自己を没入する事によって自己を首

定し、周囲からの確立を自分の中に確認する

という感情……それは自我の解放が現実の人

間社会に行われなかった日本人独特の自我意

識だ……をこの少年はぼんやりと感じたよ

うだ。

(5) 父が清兵衛に「わかりもせんくせして黙

つとれ。」と言ったその時、清兵衛は何と

思っただろうか。

○「父親は父親だが僕は僕だ。」と思った

だろう。

「清兵衛は黙ってしまった。」の一行は素直に受け取られている。だが、しきりに前述の清兵衛の気持と「好きだ」という感情との違いを気にしている。僕はこの疑問に示唆を与えようとしたが、「考えさせる」必要性を感じ、そのまま沈黙を守った後質問を進めた。

(6) 教員や父親に叱られてひょうたんを割られた時、清兵衛はどんな気持だっただろう。

父親、先生達にどんな感情を抱いただろう。

○「さびしいと思った。」○「いやだと思

ったが自分がまちがっているとは考えな

かった。」

この答えの中に、清兵衛の心理を文学として

考えようとする態度が発見できるように思

った。

さらにまた、ひょうたんから絵へ、絵を中止させられればまた他の物へと、別に自己を主張する事もせず……と自分で自分がまちがっているとは考えず、うつりかわって行く清兵衛を少年は認識することができたようだ。文学を見る純粹な目があった。しかし、

それが自分で整理出来ないらしく。

(7) 作者は何をいおうとしているのだろうか。

という質問には答えられなかった。僕は自分の

考えをおしつける事をやめて、それとなく

「自己確立」という意味を示唆し、その少年

に考えさせるようにした。

(8) 清兵衛をどう思うか。

○むじやきなようで大人のようなところがある。

その理由をつつこんで見たが明確な答は得

られなかった。志賀直哉が清兵衛に托した

「自己肯定」を、「大人のような」と表現し

たにとどまった。少年は相変らずひょうたん

に没頭する清兵衛の心を考え続けており、僕

は教師や父母への批判を問おうとする考えを

取りやめた。

以上を通し、僕にはこの教材が、非常にむ

ずかしいものである事がわかった。そしてま

た僕の単元設定も十分でなかった事も認めざるを得なかった。それにしても、少年の心に引きづけられるままであつたので独断的な鑑賞と判断があるだろうけれども、一度だけの少年との対話ではどうしようもなかった。

清兵衛は一種の特異児童である。B君もC

君も、そして志賀直哉じしんも言っているよ

うに、「清兵衛とひょうたん」は、教材とし

ては決して適当なものではない。しかし、さ

きにも述べたように、この作品は六社によつ

て教材として採られている。問題は、適不適

ではなく、どう処理するかにある。ちなみ

に、さきの六社の単元設定を見れば、一社が

「文章と表現」としているのは、「文学と

人生」「文学の勉強」「小説」「読書の楽し

み」「実篤と直哉―近代文化の歩み―」と、

すべてこれを文学単元として位置づけてい

る。ここに指導者のなやみがある。さきの報

告にもあったように、中学生たちに、これを

「文学」として理解させることはかなりの困

難がある。ここでくわしく述べていることは

できないが、このような場合、たとえば、A

さんの意見の(1)(2)のように、また、さきの一社のように、「文章と表現」という視点からだけの学習にとどめてよいと思う。高きを求めることによって、かえって学習者の文学に対する芽をつみとってしまへばならないだろう。